防災・減災のページ

むすび塾

巡回ワークショップ　@宮城・蔵王　宮司行政区

早く正確な情報共有を

蔵王山噴火想定の対策

東日本大震災の教訓を今後の備えに生かすため、河北新報社は４月22日、巡回ワークショップ「むすび塾」を宮城県蔵王町の宮司行政区で開いた。東北以外の開催を含めて54回目で、初めて火山災害をテーマにした。宮城・山形県境の蔵王山（蔵王連峰）の噴火を想定した防災対策について、住民11人が被害予測を基に話し合い、危機意識を共有して備えの大切さを確認した。

蔵王山には２０１５年４～６月、「火口周辺警報（火口周辺危険）」が発令され、お釜周辺の想定火口域から１・２㌔の範囲に蔵王町などが避難勧告を出した。

宮城県などの被害想定では積雪時に噴火した場合、融雪型火山泥流が発生し、白石川支流の松川を通じて下流の宮司区にも流れ込む恐れが指摘されている。火山灰は広範囲に農作物などへの被害をもたらし、避難行動にも支障を来す。

進行役の減災・復興支援機構（東京）の木村拓郎理事長は、実際に噴火するまで火口を特定できず、火山灰の飛散範囲は噴火の規模や風向きによって変わることなどを説明した。

八島光司さん(63)は「降灰や泥流の範囲が心配だ。噴火の情報が早めに分かれば対処のしようもあるが」と戸惑い気味に話した。

木村さんは、噴火を即時に確認する難しさを解説。「何かあったらすぐに知らせてもらえるよう、上流の遠刈田地区の人たちと情報網を作っておくのもいい」と提案した。

参加者からは、突発的な火山災害での避難に不安の声が相次いだ。渡辺愛さん(44)は「高台に逃げるべきか、家にいた方がいいのか判断が難しい」と発言。我妻美代子さん(44)は「寝たきりの高齢者を抱えている場合、どうやって避難すればいいのか」と懸念を示した。

同機構の宮下加奈専務理事は「健康面での不安があれば、事前に自主避難するのも一つの方法だ」と助言した。

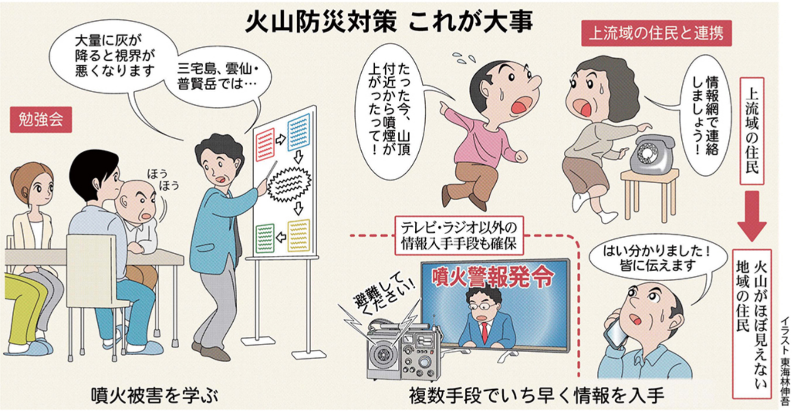
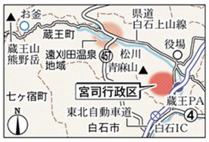

火山防災対策 これが大事
勉強会
大量に灰が降ると視界が悪くなります
三宅島、雲仙・普賢岳では…
ほう ほう
噴火被害を学ぶ
上流域の住民と連携
たった今、山頂付近から噴煙が上がったって！
情報網で連絡しましょう！
上流域の住民
火山がほぼ見えない地域の住民
はい分かりました！皆に伝えます
テレビ・ラジオ以外の情報入手手段も確保
噴火警報発令
避難してください！
複数手段でいち早く情報を入手

イラスト　東海林伸吾

防災・減災ワークショップ
むすび塾

傍聴者も加わり、深刻な火山被害の実例を学んだ「むすび塾」。住民同士で対策の必要性を確認した

火山泥流　避難訓練実施



宮司行政区は宮城県蔵王町内にある23行政区のうちの一つ。中通り、根方、下別当、鉄砲町、桑竹の５地区からなる。３月末時点で２９０世帯７９６人が住む。

白石市との境近くにある青麻山の東側裾野に広がるエリア。蔵王山に昨年４～６月発令された火口周辺警報の想定火口域からは約15～20㌔離れているが、積雪時の噴火で起きる融雪型火山泥流で氾濫する恐れのある松川が流れる。町の避難計画では約20世帯が避難対象となっている。

２０１３年10月に自主防災会を組織。融雪型火山泥流による浸水区域での避難訓練や地震を想定した訓練を実施している。災害時は指定避難所を開設し、高齢者世帯の安否確認などの支援に取り組む。

■むすび塾に参加して

宮城・蔵王　宮司行政区

【参加して】事前の備えや住民同士のつながりを日頃から保つことが大切だと感じた。町役場と連携して対策を進めたい＝宮司行政区長・斎藤貢さん(66)

【参加して】噴火規模や被害によっては、無理に避難しないという選択肢もあることが分かった。自宅避難の備えが大切だ＝パート・我妻恵美子さん(45)

【噴火被害への不安】火山灰や水質の変化が稲作にどう影響するか心配。土の入れ替えなど、火山灰の処理も大変そうだ＝農業・我妻儀一さん(67)

【噴火災害への不安】火山灰が鶏舎に積もったら下ろせるだろうか。民生委員として高齢者や子どもを避難誘導する責任もある＝養鶏業・我妻幸一さん(66)

【緊急時の備え】噴火の経験がなく、どんな対策を取ったらいいのか分からない。若者が少ない地域なので人手不足も心配だ＝会社員・我妻敏夫さん(64)

【参加して】上流域の住民とつながり、噴火情報をいち早くもらえる体制を整えておこうという助言が参考になった＝団体職員・我妻美代子さん(44)

【緊急時の備え】東日本大震災の経験上、３日目以降が心配だ。各地の火山災害や熊本地震の事例を参考にしっかり備えたい＝会社員・我妻優一さん(62)

【緊急時の備え】家族との連絡方法をあらためて確認しておきたい。ゴーグルなどの防災用品を用意する必要性を実感した＝会社員・作間恵美さん(45)

【参加して】50人の消防団員に噴火の情報をいかに早く伝えるかが鍵になる。火山災害の知識を団員たちと共有したい＝消防団分団長・平間亨さん(58)

【参加して】噴火は想像以上の被害になることが分かった。避難などの判断を迅速にできるよう、いち早い情報入手が大切だ＝パート・八島光司さん(63)

【参加して】正確な情報を得て避難すべきかどうか判断することや、自宅避難に必要な水、食料の備蓄が重要だと学んだ＝美容室経営・渡辺愛さん(44)

むすび塾の進行役を務めた減災・復興支援機構（東京）の木村拓郎理事長は、1991年の雲仙普賢岳噴火災害などの復興計画策定に参画している。宮下加奈専務理事は三宅島（東京都三宅村）出身で、83年と2000年の噴火で避難を経験した。２人はそれぞれの体験を基に、専門家の立場で火山災害対策をアドバイスした。

■専門家から

川沿い住民は即高台へ

減災・復興支援機構専務理事　**宮下　加奈さん**

噴火はいつ起こるか分からず情報入手も難しい。私自身、長期避難を経験した２０００年の三宅島噴火はテレビ速報で知った。宮司地区からは蔵王山がほぼ見えない。テレビやラジオ以外の情報入手手段を確保しておくことが有効だろう。

降灰が大量になると前が見えず、車が動かせない。無理に外に出ず、自宅避難がいい場合もある。ただ、融雪型火山泥流の危険がある川沿いの住民は早く高台に逃げることが鉄則だ。

噴火災害は長期化する「被害累積型災害」で、生活再建の見通しを立てにくい。仕事を含め、避難生活をどうしていくか考えていく必要が出てくる。

時々で被害状況や起こる現象が異なるのが噴火だ。最悪の被害状況を知っていれば、さまざまな対策を準備でき、安心して過ごすことができる。地域で定期的に勉強会を開き、災害リスクについて学んでほしい。

危険な場所の紹介有効

減災・復興支援機構理事長　**木村　拓郎さん**

火山災害はさまざまな事態が想定され、予測ができない。起きる被害は毎回違う。今の学問で分かっていないことも多い。

融雪型火山泥流では高い所に逃げるのが基本。避難する範囲は安全確保のためにいったん大きく取り、状況を見て縮小する方法が多い。

噴火すると影響は長く続く。１、２年で仕事が無くなる人も出てくる。先も見えない。長期化と長期化のもたらす経済被害が火山災害の恐怖だ。

風評被害は必ずついて回る。東京から見ると、蔵王は周辺も含めてひとくくりだ。箱根山・大涌谷（神奈川県）の噴火活動で風評被害に悩まされた温泉街は、危険な場所をホームページで紹介して誤解を解いた。どこが危ないのかしっかり知らせた方がいい。

噴火による災害に関心を持ち、ほかの地域で何が起きているかを見てほしい。対策に役立つだろう。

東日本大震災の教訓を生かすため、河北新報社は巡回ワークショップを２０１２年５月に始めました。月１回、町内会や学校、職場などで開催しています。名称には、人と人、地域と人のつながりを強め、防災・減災に結び付けていきたいとの思いを込めました。次回のむすび塾は22日、仙台市太白区の八木山地区で開きます。

随時、むすび塾の開催希望を受け付けています。連絡先は河北新報社防災・教育室０２２（２１１）１５９１。